

# 青葉苑特養部門における食事に関する取り組み

食事介助に関するアンケート調査に取り組んで

発表者：横山一成

共同発表者：夫津木誠、

萩尾貴子、新ヶ江エイコ

事業所：青葉苑

部門：特別養護老人ホーム

## はじめに

青葉苑：特養、ショートステイ、デイサービス

特養：定員50名（平均49名以上）

給食委員会で、「食事介助が入居者の食べるペースに合っていないことがあり、気になる」という意見が特養部門から出された。

特養スタッフを対象に「生活に豊かさと満足感をもたらすような食事の提供に努める」ことを目標に、アンケート実施。

アンケート結果と今後の課題について報告する。

## 食事提供の現状

- ・入居者の介護度：要介護4と要介護5が95%以上
- ・経口摂取ができる入居者：45人
  - 食事介助が必要な入所者：27人
    - うち全介助：19人
- ・食事形態：6種類  
常食、一口大、刻み、刻み餡かけ、プリン状、ペースト
- ・胃ろう：常時3～4人
  - 経管栄養と並行して経口摂取を進めるケースもある

# アンケート調査について

アンケート設問10問(4段階選択式 7問 + 記述式 3問)

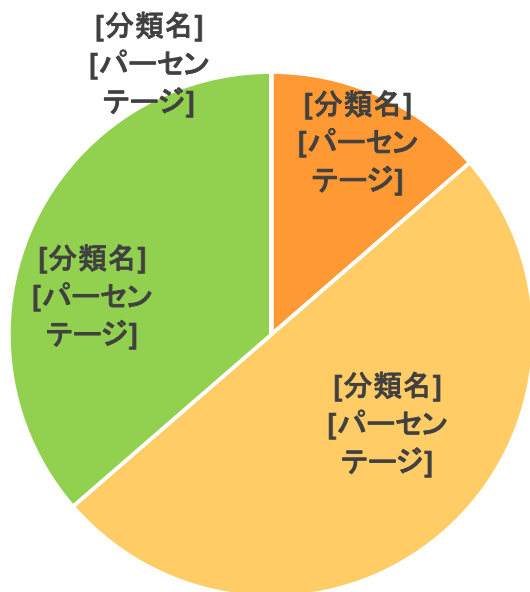
- ①メニューを説明するなどの声かけができていますか
- ②1回の食べ物の量を配慮しているか
- ③嚥下(ゴックン)の確認ができていますか
- ④介助者の座る位置が適切か
- ⑤自助具の工夫ができていますか
- ⑥食事に適した環境か
- ⑦食事介助の時間は足りていますか
- ⑧食事介助で困ったこと
- ⑨食事の提供で心がけていること
- ⑩もっとこうすればのアイディア

アンケートは、食事介助に関わる職員25人を対象とし、22人から回答を得た(回収率88%)

# 考察

## 設問1

対象者が食べ物を認識できるようにメニューの説明など声掛けを行っていますか



## 設問9 食事提供時に心がけていること

・朝昼夕いつの食事か、メニューは何か・熱い汁物への注意などの声掛けを行っている…5件

### 献立を伝えること

→何を食べるのかという不安を解消、食事への関心を持つ

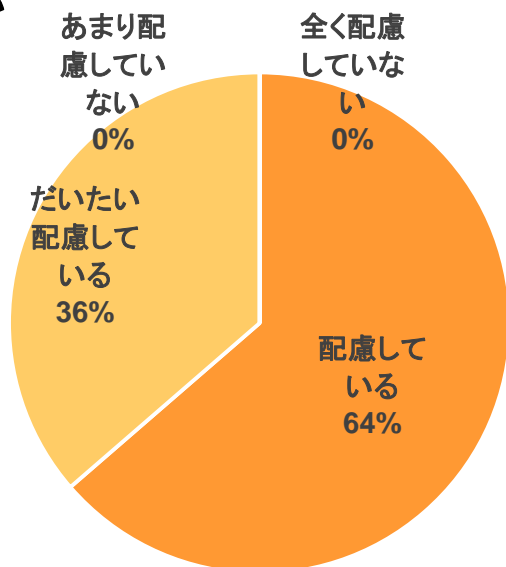
「食事ですよ」⇒「朝ごはんに行きましょう」

→時間帯の認識ができ、生活リズムができる

# 考察

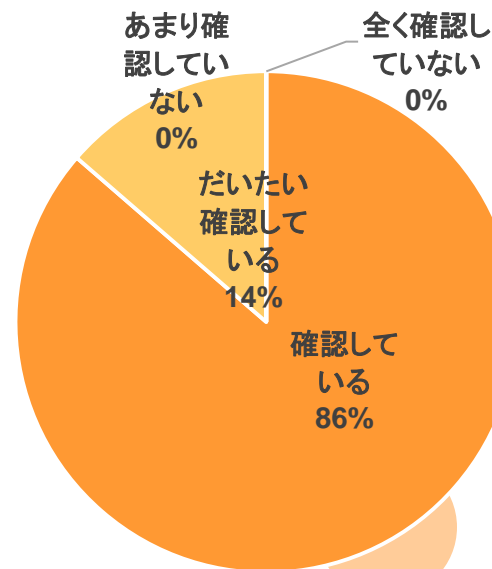
## 設問2

対象者が十分に咀嚼できるように、  
1回の食べ物の量などを配慮して  
いますか



## 設問3

対象者が飲み込んだこと(ゴックン)  
をかくにんしていますか

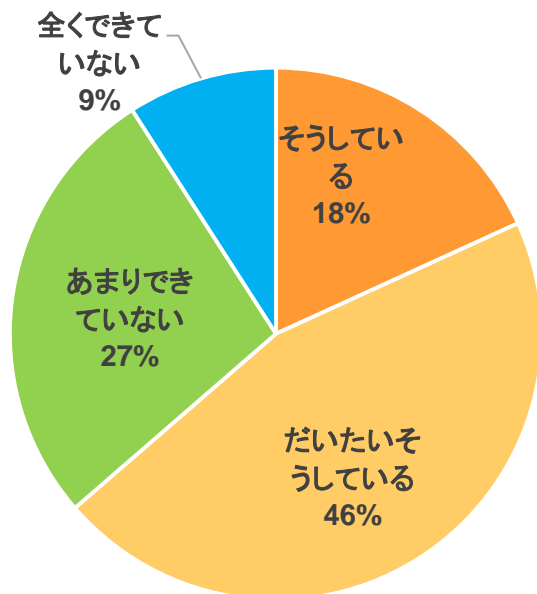


加齢や病気による嚥下力低下で、  
1回で飲み込めずに2-3回に分けて  
飲み込む人もいるため、1回量の配  
慮や嚥下確認は必ず行う必要がある

# 考察

## 設問4

介助時は斜め前に座って解除することが基本ですが、できていますか



介助者が、斜め前に座ることで、対象者の表情や口の動きが観察しやすくなる

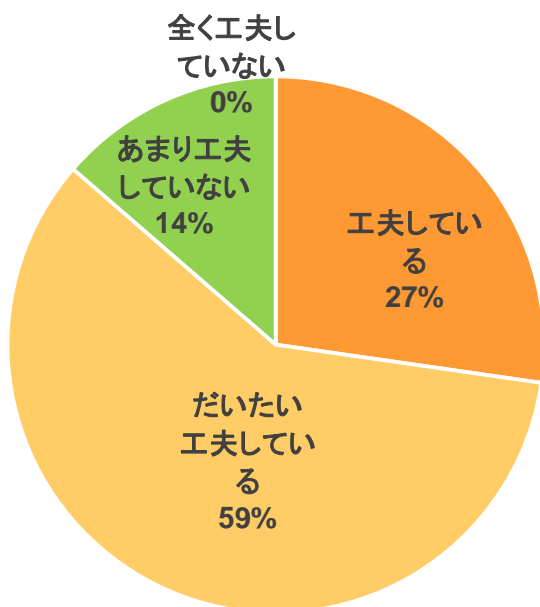
嚥下確認や座る位置など、基本的なことは繰り返し学ぶ必要がある

# 考察

## 設問5

対象者に合った自助具などの工夫ができていますか

一日でも長く、自分で食べてもらうために自助具は役立つ



### 自助具以外の工夫

口の開きが悪い→細長いスプーン

スプーンを噛んでしまう→ゴム状のスプーン

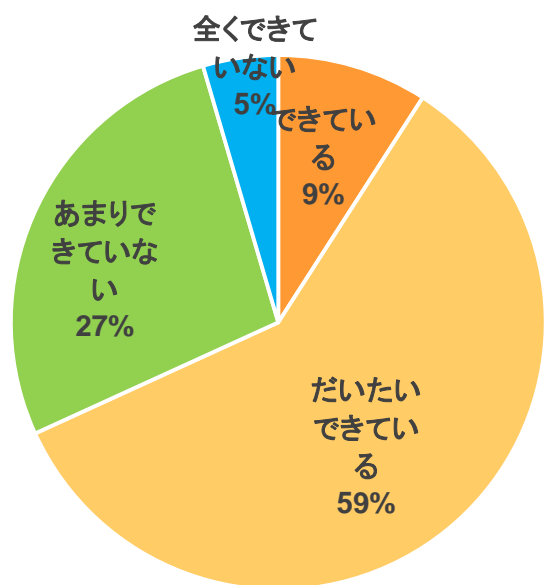
ユニットミーティングなどで、一人ひとりの食事の状態について話し合い、自助具の検討や解除の工夫などを共有することが大切



# 考察

## 設問6

食事の時間に適した雰囲気や感触の提供できていますか



## 設問10 もっとこうすればのアイデアについて

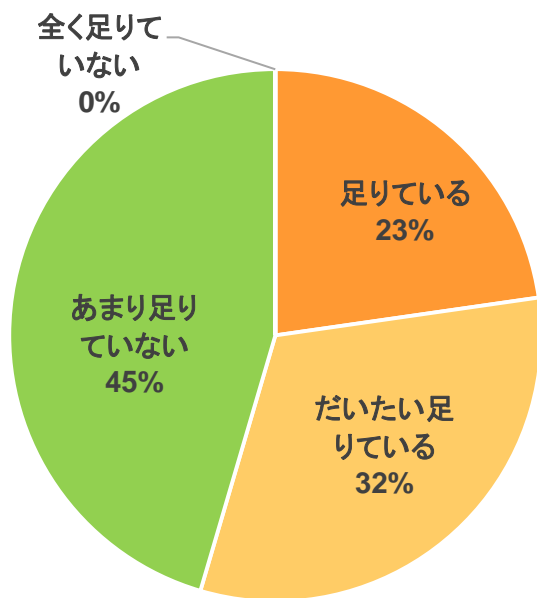
・BGM(ラジオ・クラシック・なごむ曲)を流す…4件

食事の音の工夫でリラックスできる食事環境を→検討課題

# 考察

## 設問7

食事介助の時間は足りていますか



設問10 もっとこうすればのアイデアについて

- ・丁寧な介助ができるように、時差をつけて食事時間を確保する
- ・食事介助時、ユニット関係なく解除する職員を変えてみる

職員数の問題とは別に、現状を改善する方法について、アンケートの意見も参考に検討が必要

# 考察

## 設問8

食事介助をする際に困ったことはありませんか

- ・傾眠傾向で口を開けず、口腔内にため込み飲み込まない
- ・嫌がる人にも工夫しながら介助するが、3食をしっかりと食べることが苦痛であれば、違う方法を検討できないか
- ・途中で食べられなくなった時、どこで止めたらいいか迷う
- ・脱水予防の水分摂取がノルマのように感じる
- ・人手不足

認知症のある方に対する食事介助の難しさについての回答が複数

→医師も含めた多職種でのケースカンファレンスなどの対応が必要

## まとめ

- ・食事介助の基本については、繰り返し学習する頃が大切。給食委員会に提起し、計画する
- ・認知症の方への対応についての学習が必要。研修委員会に提起する
- ・多職種でのケースカンファレンスの開催も検討する
- ・食事環境の整備や介助時間の確保、入居者に喜ばれる食事提供などについては、アンケートでの提案を参考に検討が必要

## おわりに

要介助者が多い中、多くの職員が安全に配慮しながら、食事をおいしく提供することを考えて介助に当たっていることをあらためて確認。

半面、介助時間の確保や認知症の方への対応についての課題も見えた。

生活に豊かさと満足感をもたらすような食事の提供は、常に意識して取り組む必要があり、これからも入居者の立場に立った対応ができるよう取り組んでいきたい。